

## ムルソー、考える男

松本 陽正

『異邦人』の主人公ムルソーには、20世紀を代表する小説の主人公にふさわしく、不明な部分が残されている。

たとえば、顔についてはどのような顔か想像することはできない<sup>1)</sup>。また、年齢についても、養老院の院長や社長から「若い」と言われるし<sup>2)</sup>、自分自身、「若い」と自覚してもいるのだが<sup>3)</sup>、何歳かはわからない<sup>4)</sup>。

また、いつの時代の男かという点も不明なままだ。『異邦人』は日付型小説ではない。したがって、時代の特定化は不可能だが、とはいえ、絞り込むための指標は数多くある。1939年6月16日を最後に中止となった死刑公開制度<sup>5)</sup>が残っていることも大きな指標となっている。だが、もっとも有力な指標は、フェルナンデルが人気を博していた頃、というものだろう。フェルナンデルは、1934年の『アンジェール』で名声を獲得する。したがって、小説の時代背景は、1934年以降の30年代と考えられる。だが、厳密な特定化は不可能なままだ。

なによりも、問題となるのは名前だろう。ムルソーという姓は知らされても、読者が主人公の名前を知ることはない。20世紀小説の特徴の一つである、主人公の匿名性が指摘できる作品となっている。

しかしながら、それ以外の部分については、ムルソーがどのような人間なのか、丹念に読めば、読者はかなりよく知ることができる。

ムルソー像については、たとえば、ピエール＝ジョルジュ・カステックスやピエール＝ルイ・レーなどが言及しているが<sup>6)</sup>、そうした先行研究も含め、ムルソー像を整理した後、本稿では、これまでほとんど問題とされることのなかった側面、つまり、ムルソーが知的で頭がよく、明敏な精神の持ち主である点を取りあげ、さらにムルソーがよくよく考える男、「réfléchir」する男であることを指摘する。そして、それによって、死刑を宣告された後の最終章におけるムルソーの省察が不自然なものではないことを示し、『異邦人』が緻密に計算し尽くされた作品であることを論証したい。

ムルソーはアルジェの船荷証券会社で働く、独身の、裕福とは言えぬ会社員だ。見過ごされがちな点だが、ムルソーは真面目でよく働く<sup>7)</sup>。そして、会社のことが、

彼の思考の中心を占めている。通夜を終えた朝にさえ、会社の同僚たちのことを思い、朝の起床の辛さを思い出す<sup>8)</sup>。埋葬の翌日、目覚めたときに浮かぶのも、曜日であり、その日が土曜日だということだ。出社するため、明日は早く起きないといけないと思って、寝る男なのだ<sup>9)</sup>。このように、ムルソーは会社に束縛され、習慣化した日々を送っている。第一部の各章では、ほぼ1日か2日間の出来事が描かれ、各章の冒頭部には、一日の始まりである朝か仕事や職場への言及があり、結末部は、一日の終りである夜や睡眠や疲労感への言及で結ばれている<sup>10)</sup>。こうして、前の章の結末部の言葉は次の章の冒頭部の言葉に巧みにつながり、ムルソーの習慣化されたサラリーマン生活が浮き彫りにされている。つまり、ムルソーは、『シーシュポスの神話』の記述にある「起床、電車、会社や工場での4時間、食事、電車、4時間の仕事、食事、睡眠、そして同じリズムで流れてゆく月火水木金土」(CEC, I, 227-228)といった日々を過ごしているのである。ムルソーにとっての唯一の息抜きは、マリーとの再会の後は、週末の土曜日に「マリーの身体を抱きしめる」(CEC, I, 185)ことだった。

ムルソーはまた、社長の顔色をうかがう平凡なサラリーマンでもある<sup>11)</sup>。通夜・埋葬を終え、アルジェに帰宅した翌朝、まず脳裏に浮かぶのも、2日間の休暇を願い出た時に社長が示した不満げな表情のことだった<sup>12)</sup>。

もっとも、言うべきことは、たとえ些事でも、社長に言う一面も持ちあわせている。たとえば、夕方になると回転式タオルが湿ることを指摘したり、パリ栄転話に気乗りしないことを告げたりもする。

一読すればわかることだが、ムルソーは、海と太陽とを愛し、女性に激しい欲望を抱く青年だ。その気になれば疾走するトラックに飛び乗るほどのエネルギーの爆発を示すこともある。ただ、それだけにはとどまらない。飼い犬が失踪したサラマノ老人の話に耳を傾け、助言する親切な男でもある。回転式タオルのエピソードからも見て取れるように、清潔好きでもあるし、また、夕べの散歩に喜びを見出してもいる。新聞の切り抜きの趣味があり、映画にもよく行く。また、エマニュエルやセレストとにらめっこ遊びに興じたこともあったようだ<sup>13)</sup>。

このようにムルソーは多様な顔を持った男だが、他にも、「罪」(« péché »)とは何かを知らぬ」(CEC, I, 210)男であり<sup>14)</sup>、「真に何かを後悔する」(CEC, I, 199)ということもない男でもある。「自分のしたことを後悔しているか」と予審判事から訊ねられたムルソーは、よくよく考えた後、「後悔というよりはむしろ、ある種の倦怠感を覚えています」(CEC, I, 181)と正直に答える。この点を例にあげながら、カミュ自身、「アメリカ大学版への序文」の中で「(ムルソーは)嘘をつくことを拒む」(CEC, I, 215)

男だとしている。

また、マリーには欲望を覚えるだけだが、「愛する」ことを知らない男でもない。ムルソーは、「みんなと同じように」(CEC, I, 180)母を愛している。この点について補足すれば、『異邦人』には何らかのかたちで母親への言及がなされていない章は一章もなく、そのことからムルソーの脳裏に母が常に存在していることが巧みに示されている。語り手は、「母」« ma mère »ではなく「ママ」« maman »という呼称を用いているが、この言葉から、母に全幅の信頼を寄せる幼児と同様の、ムルソーの母への愛が示されているし<sup>15)</sup>、『異邦人』は母親への真の理解にいたる「一人の<息子>の物語」<sup>16)</sup>としても読み解かれなくてはならない。

したがって、ムルソー自身にも変人意識はなく、ムルソーは自分を「みんなと同じような人間だ」(CEC, I, 179)と思っているのである。

ムルソーが普通の人と多少異なっている点は、よく言われるように、一般的に認められている価値観、社会的慣習や道徳的価値観に対して無関心なことだろう。ムルソーは、母の通夜・埋葬の日にも、悲しみの表情を見せることはないし、涙を流すこともない。また、母の葬式の翌日、泳ぎに行き、女性を誘惑することになんら良心の呵責を覚えることもない。しかし、これらの点も、「アメリカ大学版への序文」にあるように、社会的な「演技」(CEC, I, 215)の拒否として、自己の感情への忠実さの表れとして捉えなくてはならない。

ムルソーは、結婚や立身出世には何の価値も見出してはいない。では、ムルソーの支えとなるものは何もないのだろうか？ この点については、別のところに記したが<sup>17)</sup>、「男」のモラルがムルソーを支えていることを言い添えておきたい。

ムルソーは特異な体質の持ち主でもある。その点を、以下3点に要約しておこう。

- (1) 弁護士への自己分析にもあるように<sup>18)</sup>、深い疲労感にとらわれると正常な判断ができなくなってしまう。
- (2) 光に対し極度に過敏であり、さらに疲れた体に夏の太陽の光を受けると日射病的症状を呈してくる。
- (3) アルコールをよく飲むのだが、煙草も手伝い、酔いが回ると(2)と似たような症状を呈してくる。

第一部第1章の埋葬の場面では(1)と(2)の状態が、第一部第3章のレイモンと夕食を共にする日には(1)と(3)の状態が示された後、第一部第6章の殺人の日には(1)と(2)と(3)の状態が示されるのである。

問題の日曜日、前日からマリーが来ている<sup>19)</sup>。起きた時からムルソーは疲れきつ

ている。そのうえ、朝食もとらず、疲れるまで泳ぐ。さらに、マリーの脚がからんでくると、欲望を覚えてしまう。昼食時、マソンはひっきりなしにワインをついでくれる。そして、太陽の照りつける真昼の浜辺へと出て行き、最後にはアラブ人に発砲してしまうわけだが、第一部第1章と第3章とが巧みな伏線となり、意識が朦朧となった中での発砲を読者が理解できる仕組みとなっているのである。

ムルソーは、生理的欲求に対し非常に素直だ。また、そのような欲求を社会的な倫理観や道徳観によって抑えることはない。性欲だけではなく、食欲に睡眠欲も旺盛だ。ほぼ二人分を平らげてしまう場面もあるし<sup>20)</sup>、マソンの別荘での食事の場面では、朝食をとっていなかったこともあるが、料理を「がつがつ食って」しまう<sup>21)</sup>。睡眠についても、たびたび言及されているが、ムルソーはよく眠る。一例だけあげておくと、「時間をつぶす」(« tuer le temps »)(*EC*, I, 186)ことが問題だったとはいえ、獄中では「16 時間から 18 時間」(*EC*, I, 187)眠るようになる。

このようにムルソーは複雑な人物像を示しているのだが、三大欲求が激しく、快楽追求に貪欲なムルソーの動物的・本能的側面が強調されることもあった。したがって、表層的な読みだと、死刑を宣告された後、最終章でムルソーが突然変貌した印象を受けるのである。だが、はたしてそうだろうか？

死刑宣告を受けると、人間誰しも、思考を強いられよう。たとえば、サルトル「壁」においても、明朝、処刑されるという極限状況に置かれた主人公パブロ・イビエタは、思考を強いられ、それまでの自己の生を支えていたもの、友情、愛、無政府主義等々の価値を喪失してしまう。「壁」の場合、読者はパブロ・イビエタのそのような変化を納得し、容易に理解することができよう。

しかしながら、『異邦人』の場合、本能のままに刹那的に生きるムルソーの姿にばかり目が向き、第二部第5章で死と対峙し、哲学的といってもいい思索を展開する主人公に、突然の変貌といった印象を受ける読者も多いことは事実である。だが、はたしてそのような印象は正しいのだろうか？

『異邦人』についてカミュは、「これは非常に計算された本だ」(*EC*, II, 950)と『手帖』の中に書き記している。

見落とされがちな点だが、死刑を宣告された後、ムルソーは思索を展開し、上訴を断念するわけだが、最終章までにも、ムルソーがよくよく考える男、「réfléchir」する男であることが巧みに示されている。それとともに、ムルソーが、知的で頭がよく、明敏な精神の持ち主であることも、何度か述べられている。そうしたことが巧

妙な伏線となって、最終章、死刑を宣告された後の「変貌」が、まったく不自然なものとなってはいないのである。

以下、ムルソーが、知的で頭がよく、明敏な精神の持ち主であること、さらにはよくよく考える男であることを順次検証していこう。

まず、知的で頭がいい側面について、一つのエピソードから考えていきたい。第一部第5章、パリへの栄転話を断った後、ムルソーは次のように思う。

Quand j'étais étudiant, j'avais beaucoup d'ambitions de ce genre. Mais quand j'ai dû abandonner mes études, j'ai très vite compris que tout cela était sans importance réelle.  
(*CEC*, I, 165)

このことから、ムルソーがかつて学生だったことがわかる<sup>22)</sup>。すでに見たように、小説の時代背景は、1930年代後半のアルジェリアである。その当時、植民地アルジェリアでかつて学生だったムルソーは、エリートであり、知的な人間だと言えよう。さらに、過去においてムルソーは生活を変えることとか立身出世といった事柄に関心を持っていたが、今ではもうそのような事柄への関心を失った男であることもわかる。

カミュ自身によれば、『異邦人』のテーマの最初の意識的な形成は、1937年夏の『手帖』の次の記述である。

Un homme qui a cherché la vie là où on la met ordinairement (mariage, situation, etc.) et qui s'aperçoit d'un coup, en lisant un catalogue de mode, combien il a été étranger à sa vie (la vie telle qu'elle est considérée dans les catalogues de mode). (CEC, II, 824)

すなわち、表現を変えれば、ムルソーは、モードのカタログに示されているような人生に関心を持っていたが、それへの興味を失った男なのだ。そして、今ではムルソーには、すべての生が等価に映るのである。社長に対し、次のように答えるのであった。

J'ai répondu qu'on ne changeait jamais de vie, qu'en tout cas toutes se valaient et que la mienne ici ne me déplaisait pas du tout. (CEC, I, 165)

この部分は、すべてが等価だとするムルソーの結末部での以下の叫び<sup>23)</sup>を先取りしている点できわめて重要である。

Du fond de mon avenir, pendant toute cette vie absurde que j'avais menée, un souffle obscur remontait vers moi à travers des années qui n'étaient pas encore venues et ce souffle égalisait sur son passage tout ce qu'on me proposait alors dans les années pas plus réelles que je vivais. [...] Le chien de Salamano valait autant que sa femme. La petite femme automatique était aussi coupable que la Parisienne que Masson avait épousée ou que Marie qui avait envie que je l'épouse. Qu'importait que Raymond fût mon copain autant que Céleste qui valait mieux que lui ? (CEC, I, 212)

つまり、死刑宣告を受ける前からすでに、ムルソーにはすべてが等価に見えていたのである。それゆえ、ムルソーは「どちらでもいいことだ」(« cela m'est égal »)(CEC, I, 159, 162, 165)といった「無関心な言葉」<sup>24)</sup>を使っていたのである。

では、なぜそのような意識を抱くようになったのだろうか？ この点については、作品中に言及はない。だが、このように考えることもできるだろう。つまり、ムルソーは、以下にあげる『シーシュポスの神話』の記述にあるように、習慣的な生活の中で「なぜ？」という疑問を抱き、倦怠感にとらわれたことがあったが、しかし結局、日常の連鎖へと回帰し、ふたたび日々を習慣化して生きている男だと。

Il arrive que les décors s'écroulent. Lever, tramway, quatre heures de bureau ou d'usine, repas, tramway, quatre heures de travail, repas, sommeil et lundi mardi mercredi jeudi vendredi et samedi sur le même rythme, cette route se suit aisément la plupart du temps. Un jour seulement, le « pourquoi » s'élève et tout commence dans cette lassitude teintée d'étonnement. « Commence », ceci est important. La lassitude est à la fin des actes d'une vie machinale, mais elle inaugure en même temps le mouvement de la conscience. Elle l'éveille et elle provoque la suite. La suite, c'est le retour inconscient dans la chaîne, ou c'est l'éveil définitif. Au bout de l'éveil vient, avec le temps, la conséquence : suicide ou rétablissement. (CEC, I, 227-228)

第二部、獄中でもムルソーは日常の連鎖が断ち切られる瞬間を再体験する。マリ

一の面会の後、妻ではないからもう面会には来られないことを手紙で知らされると、ムルソーは自由人としての考えを捨て、囚人として生きようとする。順応性のあるムルソーは、それに成功する。そして、5ヶ月間、牢獄での日々を習慣化して生きていたのだが、ある日、鉄製の椀に映る自分自身を<異邦人>と感じる瞬間、日常の連鎖が断ち切られる瞬間を体験する<sup>25)</sup>。だが、無意識的に日常の連鎖へと回帰し、裁判まで習慣化した日々を送っただろうと推測されるのである。

このようにムルソーは、日々を習慣化して生きてはいるが、かつて学生だった知的な人間であり、不条理な感覚を体験したことのある男であり、獄中でも体験する男なのである。

裁判で次席検事は、「この男は、みなさん、この男は頭がいい男(« intelligent »)です。この男の陳述をお聞きになられたでしょう。この男は答え方を心得ているのです。言葉の価値を知っているのです」(CEC, I, 199)と言うのであった。

事実、ムルソーは「意味のないことは喋らない」「男」(CEC, I, 194)である<sup>26)</sup>。また、明敏さとも関係するが、レイモンを諷めるために瞬間的にレイモンの<男>の矜持に訴えかけようと判断し、適切な言葉によってレイモンからピストルを取りあげるのである。

Mais sans quitter des yeux son adversaire, Raymond m'a demandé : « Je le descends? » J'ai pensé que si je disais non il s'exciterait tout seul et tirerait certainement. Je lui ai seulement dit : « Il ne t'a pas encore parlé. Ça ferait vilain de tirer comme ça. » On a encore entendu le petit bruit d'eau et de flûte au cœur du silence et de la chaleur. Puis Raymond a dit : « Alors, je vais l'insulter et quand il répondra, je le descendrai. » J'ai répondu : « C'est ça. Mais s'il ne sort pas son couteau, tu ne peux pas tirer. » Raymond a commencé à s'exciter un peu. L'autre jouait toujours et tous deux observaient chaque geste de Raymond. « Non, ai-je dit à Raymond. Prends-le d'homme à homme et donne-moi ton revolver. Si l'autre intervient, ou s'il tire son couteau, je le descendrai. » (CEC, I, 173-174)

知的な頭のよさとともに、このような明敏さは他の箇所にも見つかる。

ムルソーの観察眼は鋭い。葬列から遅れたペレーズが近道をとったことをすぐに了解する<sup>27)</sup>。また、入口の敷居のところで何か興奮した様子のサラマノ老人の姿にも「遠くの方から」気づく<sup>28)</sup>。

その場面、レイモンが「どうしたのか」と尋ねても答えぬ老人に対し、ムルソー

は「犬はどこにいるのか」(CEC, I, 163)と的確な質問をし、老人の返事を引き出すのであった。

ムルソーはまた、瞬間的に事実解釈のできる男でもある。浜辺でアラブ人に遭遇した時、マソンが「どうして奴らは俺たちをここまでつけてこられたのだろう」と尋ねるのに対し、ムルソーは次のように推測する。

J'ai pensé qu'ils avaient dû nous voir prendre l'autobus avec un sac de plage, mais je n'ai rien dit. (CEC, I, 172)

さらに、ムルソーは客観的な状況判断が瞬時にできる男でもある。アラブ人と向き合ったムルソーは、日射病的状態になりながらも、「自分が回れ右をしさえすれば、それで事はすむ」と思うのであった。

J'ai pensé que je n'avais qu'un demi-tour à faire et ce serait fini. (CEC, I, 175)

ムルソーはまた、人間の本質を見抜く目を持っている。サラマノ老人と犬との関係について、セレスト、レイモン、マリーの考えや反応を順次あげ、この点を検証してみよう。

Céleste dit toujours que « c'est malheureux », mais au fond, personne ne peut savoir. (CEC, I, 156)

Lui [=Raymond] aussi m'a dit, en parlant de Salamano : « Si c'est pas malheureux ! »  
Il m'a demandé si ça ne me dégoûtait pas et j'ai répondu que non. (CEC, I, 156)

J'ai raconté à Marie l'histoire du vieux et elle a ri. (CEC, I, 161)

セレストとレイモンは嫌悪感を示し、マリーは笑うのに対し、ムルソーは嫌悪感を覚えることはないし、老人と犬とがどのような関係にあるかは「誰にもわからない」と述べている。事実、犬の失踪後、サラマノ老人が犬を愛していたことが知られる。つまり、老人は犬に対してアンビヴァレンツな感情を抱いていたのであり、ムルソーはそのことを見抜いていたと言える。このようにムルソーは人間の心の奥底を見抜く、鋭い感受性を持ちあわせてもいるのである。



ここで少し角度を変えて、「*penser*」（「～だと思ふ」）、「*trouver*」（「～だと思ふ」）の複合過去形の使用例から、ムルソーが瞬間的に状況を的確に判断し、理解する能力の持ち主であることを例示しておきたい。

すでに7ページと8ページとに二重下線を引いてあげた「*penser*」の3つの用例からも、ムルソーが瞬時に状況を的確に判断する明敏な精神の持ち主であることが見て取れるが<sup>29)</sup>、ここでは、言おうと思ったことを心の中で瞬間的にチェックし、否定する判断能力の持ち主であることがよく示されている「*penser*」の用例を2つあげておこう。

Elle [=Marie] a eu un petit recul, mais n'a fait aucune remarque. J'ai eu envie de lui dire que ce n'était pas de ma faute, mais je me suis arrêté parce que j'ai pensé que je l'avais déjà dit à mon patron. (EC, I, 152)

J'allais répondre que c'était justement parce qu'il s'agissait de criminels. Mais j'ai pensé que moi aussi j'étais comme eux. (EC, I, 181)

第二部第4章、裁判で検事の事件解釈を耳にしたムルソーは、「うそだ、うそだ」とわめくのではなく、冷静に判断をください。「*trouver*」の用例を見てみよう。

J'ai trouvé que sa façon [=du procureur] de voir les événements ne manquait pas de clarté. Ce qu'il disait était plausible. (EC, I, 199)

即座の思考、即座の判断を示すこれらの動詞の使用例は、ムルソーの頭のよさをよく示してくれている。

のみならず、ムルソーは、よくよく考える男、「*réfléchir*」する男でもある。

死刑を宣告された後、最終章でムルソーは死と対峙し、思索を展開する。ギロチンについて省察をめぐらせ、絶対に逃げ道がないことを悟る。

Car en réfléchissant bien, en considérant<sup>30)</sup> les choses avec calme, je constatais que ce qui était défectueux avec le couperet, c'est qu'il n'y avait aucune chance, absolument aucune. (EC, I, 206)

ムルソーは、処刑と上訴とについても省察をめぐらせる。

Il y avait aussi deux choses à quoi je réfléchissais tout le temps : l'aube et mon pourvoi.  
(*CEC*, I, 206)

上訴を断念したムルソーの脳裏に、結末近く、久しぶりにマリーのことが浮かぶ。よくよく考えた末、マリーが手紙を寄こさなくなった理由をムルソーは了解する。

Pour la première fois depuis bien longtemps, j'ai pensé à Marie. Il y avait de longs jours qu'elle ne m'écrivait plus. Ce soir-là, j'ai réfléchi et je me suis dit qu'elle s'était peut-être fatiguée d'être la maîtresse d'un condamné à mort.  
(*CEC*, I, 208)

このように、最終章では3度にわたって「réfléchir」という語が使われている。しかしながら、見落としてはならぬのは、それまでも「réfléchir」という語が頻繁に用いられ、それによってムルソーがよくよく考える男であることが示されていたという点だ。

「réfléchir」という言葉の使用例は、全部で15回みつかるとは、第一部第3章のレイモンと第二部第1章の弁護士に関する使用例<sup>31)</sup>以外は、すべてムルソーに関するものとなっている。つまり、「réfléchir」という語はムルソーに対し13回用いられているのである。「réfléchir」の項目は『コンコルダンス』に欠落しているため、最終章以外で用いられている10の用例について、以下、あげておこう<sup>32)</sup>。

通夜、最初は躊躇し、そしてよくよく考えた後、ムルソーは煙草を吸う。(第一部第1章)

(用例1) Comme j'aime beaucoup le café au lait, j'ai accepté et il est revenu un moment après avec un plateau. J'ai bu. J'ai eu alors envie de fumer. Mais j'ai hésité parce que je ne savais pas si je pouvais le faire devant maman. J'ai réfléchi, cela n'avait aucune importance. J'ai offert une cigarette au concierge et nous avons fumé.  
(*CEC*, I, 144-145)

埋葬の日の朝、会社の同僚たちのことなどについて、思い巡らす場面。(第一部第1章)

(用例 2) Mais j'ai attendu dans la cour, sous un platane. Je respirais l'odeur de la terre fraîche et je n'avais plus sommeil. J'ai pensé aux collègues du bureau. À cette heure, ils se levaient pour aller au travail : pour moi c'était toujours l'heure la plus difficile. J'ai encore réfléchi un peu à ces choses, mais j'ai été distrait par une cloche qui sonnait à l'intérieur des bâtiments. (CEC, I, 147)

生活を変える必要が見当たらないので、社長の提案に対しそっけない返事をした後、自分の今の生活についてよくよく考え、不幸ではないと思う。(第一部第 5 章)

(用例 3) J'aurais préféré ne pas le mécontenter, mais je ne voyais pas de raison pour changer ma vie. En y réfléchissant bien, je n'étais pas malheureux. (CEC, I, 165)

予審で 5 発の弾丸について尋ねられたとき。(第二部第 1 章)

(用例 4) Toujours sans logique apparente, le juge m'a alors demandé si j'avais tiré les cinq coups de revolver à la suite. J'ai réfléchi et précisé que j'avais tiré une seule fois d'abord et, après quelques secondes, les quatre autres coups. (CEC, I, 180)

予審で後悔を感じているかと尋ねられたとき。(第二部第 1 章)

(用例 5) Il [=le juge d'instruction] m'a seulement demandé du même air un peu las si je regrettais mon acte. J'ai réfléchi et j'ai dit que, plutôt que du regret véritable, j'éprouvais un certain ennui. J'ai eu l'impression qu'il ne me comprenait pas. (CEC, I, 181)

枯れ木の中でだって生きられると思うが、よく考えると枯れ木の中にいるのではなかったと思う場面。(第二部第 2 章)

(用例 6) Or, à bien réfléchir, je n'étais pas dans un arbre sec. Il y avait plus malheureux que moi. C'était d'ailleurs une idée de maman et elle le répétait souvent, qu'on finissait par s'habituer à tout. (CEC, I, 185)

囚人となったムルソーにとって、「時間をつぶす」ことが問題となるが、睡眠、食事、用便や新聞記事を読むことなどの他に、ムルソーは、部屋にあったものをよくよく考え想起することで、獄中での時間をつぶそうとする。考えれば考える程、忘れていたものが蘇ってくる。(第二部第 2 章)

(用例 7) Si bien qu'au bout de quelques semaines, je pouvais passer des heures, rien qu'à

dénombrer ce qui se trouvait dans ma chambre. Ainsi, plus je réfléchissais et plus de choses méconnues et oubliées je sortais de ma mémoire.<sup>33)</sup> (CEC, I, 186-187)

外見に反し、ムルソーは自分の裁判にまったく無関心というわけではない<sup>34)</sup>。ムルソーはいろいろなことをよく考えようとするのである。だが、彼には考える暇は与えられない。「よくよく考えてみる時間がなかった」(«je n'ai pas eu le temps de réfléchir»)と2度にわたって述べられている。(第二部第3章)

(用例 8) Je m'étonnais encore de ne pas les avoir aperçus plus tôt, lorsque à l'appel de son nom, le dernier, Céleste s'est levé. J'ai reconnu à côté de lui la petite bonne femme du restaurant avec sa jaquette et son air précis et décidé. Elle me regardait avec intensité. Mais je n'ai pas eu le temps de réfléchir parce que le président a pris la parole.

(CEC, I, 191)

(用例 9) Je n'ai pas eu le temps de réfléchir. On m'a emmené, fait monter dans la voiture cellulaire et conduit à la prison où j'ai mangé. Au bout de très peu de temps, juste assez pour me rendre compte que j'étais fatigué, on est revenu me chercher ; tout a recommencé et je me suis trouvé dans la même salle, devant les mêmes visages.

(CEC, I, 192)

これらの例から、「réfléchir」する暇を与えず<sup>35)</sup>、ムルソー抜きで事件を迅速に機械的に処理しようとする裁判の非人間性が浮かびあがってくる<sup>36)</sup>。

死刑宣告を受けた後、ムルソーはよくよく考えて、「ありません」と答える。(第二部第4章)

(用例 10) Mais le président m'a demandé si je n'avais rien à ajouter. J'ai réfléchi. J'ai dit : « Non. » C'est alors qu'on m'a emmené. (CEC, I, 204)

知的で頭がよく、明敏な精神の持ち主であるうえに、このようにムルソーは、最終章以前からすでに、よく考える男、「réfléchir」する男として提示されていたのである。それゆえ、死を宣告された後のムルソーの思索の展開は、まったく不自然なものとなっただけではないと言えよう。

こうした点からも、『異邦人』がきわめて巧みな構成をとる作品であることが見て取れるのである。

ところで、「réfléchir」の用例を調べてみると、興味深いことに出会うことを指摘して、この小論を終えたい。

裁判で門番は次のように証言するのであった。

Il [=le concierge] a dit que je n'avais pas voulu voir maman, que j'avais fumé, que j'avais dormi et que j'avais pris du café au lait. J'ai senti alors quelque chose qui soulevait toute la salle et, pour la première fois, j'ai compris que j'étais coupable.

(*EC*, I, 193)

門番のこの証言によって、延内にどよめきが起こるが、しかしこの証言以上のことをわれわれ読者は知っている。(用例 1) をもう一度見てみよう。たばこを吸う前、ムルソーは最初は躊躇し、そしてよくよく考えた後、煙草を吸うのだった<sup>37)</sup>。だが、ムルソーが「réfléchir」したことは、その場に居合わせた門番には伝わらない。ムルソーが「réfléchir」したことを知っているのは、われわれ読者だけなのである。つまり、ムルソーは外面だけから判断されてしまうのである。

さらに、ムルソーが「réfléchir」した結果述べたことも理解されることはない。(用例 5) を見てみよう。この用例から、ムルソーが「réfléchir」して正直に述べたことが、相手に伝わらないことがわかる。

「réfléchir」した事実が相手に伝わらないこともあるし、「réfléchir」して正直に述べたことが相手に理解されることもない<sup>38)</sup>。このように、「réfléchir」という動詞一つとっても、ムルソーが <異邦人> として社会から排除される可能性が巧みに示唆されているのである。

## 注

アルベール・カミュの作品を以下のように略記し、本文中に直接ページを示す。

ÆC, I Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome I, 1931-1944,  
« Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.

ÆC, II Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome II, 1944-1948,  
« Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.

なお、引用文中の下線はすべて松本による。また、邦訳のあるものについては、それを参照させていただいたことをお断りしておく。

- 1) 裁判の場面でムルソーは、「多少不均齊な顔」で「とても澄んだ眼」をした若い新聞記者から見つめられ、「自分に見られているような奇妙な印象を持つ」(ÆC, I, 190)が、かといってこの新聞記者と同じ容貌だと断じ切れない。むしろ、「奇妙な」という言葉から、容貌は異なっていると判断すべきだろう。
- 2) ÆC, I, p.142 ならびに p.164 参照。
- 3) ÆC, I, p.185 参照。
- 4) 死刑を宣告された後のムルソーの省察の中に、「30歳で死のうが、70歳で死のうが、大した違いはない」(ÆC, I, 207)とあるが、これを根拠に「30歳」とすることはできまい。仮にそうだとすれば、「70歳」は誰を指すのだろうか？ 母親だろうか？ だとすれば、ムルソーは、母親が40歳の時に生まれたのだろうか？ この「30歳」はあくまでも例示として捉えるべきだろう。『シーシュポスの神話』の中にも「30歳」が例として用いられている記述が見つかる。ÆC, I, p.228 参照。
- 5) Pierre-Louis Rey, *L'Étranger Albert Camus*, Hatier, « Profil d'une œuvre », 2003, pp.15-16 参照。
- 6) Pierre-Georges Castex, *Albert Camus et « L'Étranger »*, José Corti, 1965. Pierre-Louis Rey, *op.cit.*
- 7) 三例あげておく。「Aujourd'hui j'ai beaucoup travaillé au bureau.」(ÆC, I, 154) « J'ai travaillé tout l'après-midi. » (ÆC, I, 155) « J'ai bien travaillé toute la semaine [...] » (ÆC, I, 160) 真面目な社員ゆえ、ムルソーは社長からも評価され、パリ栄転話を持ちかけられたりもするのである。
- 8) ÆC, I, p.147 参照。
- 9) ÆC, I, p.164 参照。
- 10) もちろん、第6章は例外となっている。

- 11) *ÆC*, I, p.141, p. 154 ならびに p. 164 参照。
- 12) *ÆC*, I, p.151 参照。
- 13) *ÆC*, I, pp.209-210 参照。
- 14) また、ムルソーは自分が「犯罪者」(« criminel »)であるという考えにも慣れることができない。*ÆC*, I, p.181 参照。
- 15) サルトルは次のように指摘していた。「Mais il désigne toujours sa mère du mot tendre et enfantin de « maman » et il ne manque pas une occasion de la comprendre et de s'identifier à elle.» (Jean-Paul Sartre, *Explication de « L'Étranger »* in *Situations, I*, Gallimard, 1947, pp.108-109.) ロジェ・グルニエは、さらに踏み込んで次のように言う。「Il [=Meursault] n'avait pas besoin de pleurer à l'enterrement pour que celle qu'il appelle « maman », jamais « ma mère », soit le seul être avec qui il se sente en communion immédiate, au-delà des mots, de la pensée, et même des larmes.» (Roger Grenier, *Notice in Œuvres complètes d'Albert Camus 7*, Gallimard et Club de l'Honnête Homme, 1983, p.108.
- 16) パンゴは次のように指摘している。「Mais nous n'aurons pas épuisé les sens possibles de *L'Étranger* si nous ne lisons pas aussi ce livre comme l'histoire d'un  *fils* .» (Bernard Pingaud, *L'Étranger de Camus*, Hachette, « Poche critique », 1973, p.71.)
- 17) 拙稿,「アルベール・カミュにおける<男>について」,『フランス語フランス文学研究』, Vol.67, 日本フランス語フランス文学会, 1995, pp.72-74 参照。
- 18) «Cependant, je lui [=à l'avocat] ai expliqué que j'avais une nature telle que mes besoins physiques dérangent souvent mes sentiments. Le jour où j'avais enterré maman, j'étais très fatigué et j'avais sommeil. De sorte que je ne me suis pas rendu compte de ce qui se passait.» (*ÆC*, I, 178)
- 19) 再会後, マリーは土曜日には泊まっているのだが, 何よりも «[...] à cause de ma fatigue et aussi parce que nous n'avions pas ouvert les persiennes [...]»(*ÆC*, I, 168) との記述から, マリーと一夜を共にしたことが明瞭に読み取れる。
- 20) *ÆC*, I, p.162 参照。
- 21) « Le pain était bon, j'ai dévoré ma part de poisson. » (*ÆC*, I, 171) そんなムルソーだが, 母の通夜の折には, 食欲がなかったことを見落としてはならない。*ÆC*, I, p.144 参照。
- 22) 少々先走る点もあるが, この点に関するカステックスの見解をあげておく。  
« Meursault a donc été étudiant. Quelles études a-t-il faites ? il ne le dit pas. Rien ne nous interdit d'imaginer qu'il a pu, comme Camus, méditer sur les œuvres des philosophes.

Une telle formation légitimerait le tour abstrait qu'il lui arrive, surtout dans le dernier chapitre, de donner à ses propos, malgré son absence d'intérêt pour les spéculations de l'esprit. » (Pierre-Georges Castex, *op.cit.*, p.69.)

- 23) 「不条理な」(« absurde ») という言葉が使われている唯一の箇所でもある。
- 24) Pierre-Georges Castex, *op.cit.*, p.111. « cela m'est égal » の使用箇所については、カステックスも指摘している。同書, p.112 参照。
- 25) *ÆC*, I, pp.187-188 参照。この〈鏡〉の啓示については、拙稿, 「アルベール・カミュにおける《鏡》について」, 『フランス文学』, Vol.12, 日本フランス語フランス文学会中国・四国支部, 1978, pp.47-49 を参照されたい。
- 26) したがって, マソンの意味のない言葉づかいにもムルソーは敏感だ。 *ÆC*, I, p.170 参照。
- 27) *ÆC*, I, p.150 参照。
- 28) *ÆC*, I, p.163 参照。他にも, 面会所の特徴を瞬時に把握する場面なども好例となる。 *ÆC*, I, p.183 参照。
- 29) 他に 2 例あげておく。 « On m'a encore fait décliner mon identité et malgré mon agacement, j'ai pensé qu'au fond c'était assez naturel, parce qu'il serait trop grave de juger un homme pour un autre. » (*ÆC*, I, 191) « Moi, j'ai pensé que c'était m'écarter encore de l'affaire, me réduire à zéro et, en un certain sens, se substituer à moi. » (*ÆC*, I, 201)
- 30) « réfléchir » に近い意味合いで用いられている « considérer » の用例は, 他の箇所にも見つかる。 « Mais, tout bien considéré, rien ne me permettait ce luxe, tout me l'interdisait, la mécanique me reprenait. » (*ÆC*, I, 204)
- 31) *ÆC*, I, p.159 ならびに p. 178 参照。
- 32) « réflexion » の使用例もあげておく。  
« De temps en temps, j'avais envie d'interrompre tout le monde et de dire : « Mais tout de même, qui est l'accusé? C'est important d'être l'accusé. Et j'ai quelque chose à dire. » Mais réflexion faite, je n'avais rien à dire. » (*ÆC*, I, 198)  
« Je calculais mes effets et j'obtenais de mes réflexions le meilleur rendement. » (*ÆC*, I, 207)
- 33) プルーストの無意思的記憶と対比させると興味深いものがある。
- 34) 次のような記述がある。 « Et même, dans un sens, cela m'intéressait de voir un procès. Je n'en avais jamais eu l'occasion dans ma vie. » (*ÆC*, I, 189) 。また, 裁判の展開について, 口をはさみたくもなる。 « [...] j'étais parfois tenté d'intervenir [...] » (*ÆC*, I,



- 198) この点については、注 32)の第一例も参照されたい。
- 35) とはいえ、まったく «réfléchir» できなかったとも言えない。注 32)の第一例参照。
- 36) 一例をあげておく。「En quelque sorte, on avait l'air de traiter cette affaire en dehors de moi. Tout se déroulait sans mon intervention. Mon sort se réglait sans qu'on prenne mon avis » (CEC, I, 198)
- 37) この箇所をカステックスは次のように説明している。「L'envie de fumer lui est venue : « J'ai hésité », dit-il, « parce que je ne savais pas si je pouvais le faire devant maman. J'ai réfléchi, cela n'avait aucune importance ». [...] Meursault [...] éprouve d'abord un scrupule vague, qu'il écarte par raisonnement. Sa logique annule l'interdit social auquel il était sur le point de se conformer. » (Pierre-Georges Castex, *op.cit.*, pp.105-106.)
- 38) さらに言えば, «réfléchir» していないのに, «réfléchir» したと他者から判断される場面もある。次席検事は次のように述べるのであった。「[...] il ne s'agit pas [...] d'un acte irréfléchi »(CEC, I, 199)

## Meursault, un homme qui réfléchit

Yosei MATSUMOTO

Comme certains héros de romans du vingtième siècle, Meursault, héros de *L'Étranger*, garde une part d'ombre dans son personnage. Le lecteur ne peut imaginer son visage ni deviner son âge. Quant à la date où se déroule ce roman, quoiqu'on pourrait supposer qu'elle se situe dans les années 30, après 1934 au plus tôt, il reste impossible de la déterminer avec précision. On peut y reconnaître également l'anonymat du héros, une des caractéristiques des romans du siècle dernier : le lecteur ne connaît jamais le prénom de Meursault.

Ces parties mises à part, le lecteur pourrait cerner le genre d'homme qu'est Meursault s'il lit ce roman attentivement : Meursault est un jeune homme qui aime la mer et le soleil. C'est également un salarié ordinaire mais travailleur, et la routine est son quotidien. Il cherche à satisfaire ses besoins primordiaux et ne prête aucune valeur aux conventions. Le lecteur peut percevoir d'autres aspects de son caractère ainsi que son tempérament singulier.

Cependant, celui qui s'obstinerait à l'image d'un Meursault vivant instinctivement et momentanément, s'étonnerait de son changement en lisant sa réflexion quasi philosophique sur la mort dans le dernier chapitre. Mais cette impression est-elle juste ?

Il ne faudrait pas oublier que Meursault était étudiant : il est intelligent. Il avait d'ailleurs déjà éprouvé le sentiment de l'absurde avant même sa condamnation à mort. Il ne faudrait pas oublier non plus qu'il a de la sagacité, ce qui lui permet de juger de la circonstance en un instant et avec justesse. Enfin, malgré son apparence, Meursault est un homme qui réfléchit. Le mot « réfléchir » est employé trois fois dans le dernier chapitre, mais il est à remarquer que ce verbe a été utilisé dix fois pour Meursault même avant sa réflexion sur la mort. Avec ces indices ingénieux et minutieux, le développement de sa réflexion finale n'est pas dénué de naturel. Notre étude se voudrait un des exemples pour prouver que *L'Étranger* est « un livre très concerté » (*Carnets*).